

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



小説 伊吹泰郎

挿絵 神保玉蘭

プロローグ	
第一章	とある平日
第二章	とある金曜日
第三章	とある土曜日
第四章	とある日曜日
エピローグ	

登場人物紹介

Characters



さいおんじ まなみ
西園寺 愛美

世間に疎い箱入り娘のお嬢様。和馬に想いを寄せている。上品な外見に似合わず、時に突拍子のない行動をすることも。現在は和馬と同居し、同じ学校に通っている。

たかみや かおるこ
高宮 薫子

高飛車で強引なお嬢様。愛美と同じく、和馬に想いを寄せている。幼気な外見ながら非常に積極的で、和馬との仲を両親に説得させるため前作のラストで海外に旅立った。

ほうじょう
北条 さやか

凜としたスーツ姿が似合う、ショート黒髪が美しいお嬢様。親の会社を受け継ぐため、経営者としての勉強をしている。幼い頃、和馬とある約束をしたらしいが……。

きの さきりん
城之崎 凜

愛美付きのメイド。毅然とした性格の反面、恋愛や性の類の話は一切苦手。

こんどう しおり
近藤 詩織

薫子付きのメイド。掴み所がなく、周囲を唾然とさせる行動をとることも多い。なぜか性経験が豊富。

うえすぎ かずま
上杉 和馬

両親の仕事の都合で幼い頃より引っ越しを繰り返していた。現在は日本で愛美と凜とともに生活している。

指が秘所に届くや、ヌルツとした感触が伝わってきた。

「ふあああつ!? 和馬さ……まあっ……!」

大事な場所を責められた愛美は、カクツと膝を崩しかける。それを支えながら、紅潮した耳たぶを和馬は軽く唇で挟んだ。

「んっ……ああっ!」

「こんなに濡れてたんだね……」

敢えて言葉で確認し、愛美が悩ましげに身じろぎするのを感じながら、水音の源をさらにまさぐる。愛美の秘唇はやや肉厚気味で、指の腹で合わせ目を圧迫すると、その分だけ指先が沈み込んでいく。

（でも……もう、『合わせ目』って感じじゃないかも……）

愛美はフェラチオをしながら、相当に欲情していたらしい。割れ目はすっかり緩んでおり、少年の指先は、充血して膨らんだ褌の端にも容易く触れることができた。愛液もトロトロと滴って、重力へ引かれるままに下へ垂れている。和馬が身体をずらして見下ろすと、むっちりした太腿には幾本もの濡れた筋ができていた。

（うん……このまま……入れても大丈夫そうっ……）

すでに過剰なほど濡れそぼった割れ目は、指どころか、未だに猛ったままの肉竿でも受け入れてくれそうだ。その判断を後押しするように、愛美が切なげに喉を鳴らす。

「あっ……お、お願いします……！ 和馬様っ……わたくしの中に来てください……っ！
わたくしっ……和馬様と一つになりたいです……ううっ！」

彼女の願いも、少年と同じだったのだ。

「うんっ……！」

和馬は左手を相手の腰へ、右手を自らの男根の付け根へ移した。そそり立つペニスには、子種や涎など、何種類もの体液がこびり付いたままである。そのヌルヌルの切っ先を、指が離れたばかりの割れ目にあてがった。

グチュリッ！

「っあああっ！」

鈴口周りが陰唇へ当たった途端、押し寄せてきた熱で、少年の脚は勝手にガクガク震えそうになる。

（イッた……ばっかり……だからっ……ぼ、僕うっ……すごく感じやすい……いいっ……！）

理由が分かってても、どうにもならない苛烈さだ。

愛美も顔を伏せ、「ひくううっ！」と喘いでいた。

「あ……あっ……いく……よ！」

和馬は呻きを押し殺し、自分を鼓舞するように宣言する。合わせて、右手で男根を上下

に動かし、秘洞へと通じる入り口を探った。

「うくうう……っ！ んぐっ……ううっ……ああおっ！」

時間にすれば、かかっているのはほんの数秒にも満たない。だが、粘膜同士が触れ合っている、声を抑えられないほど気持ちいい。全身に鳥肌が立った。

そんな愉悅の中、和馬の先端は秘所の中に深い一点を見つけ出す。

(よお……しっ！)

奥へ飲み込まれるような感覚に、和馬は力の抜けかけた脚を突っ張らせ、グイッと腰を突き出した。

ズブブッ……！ ズチュブウウツ！

狙い通り、剛直は愛美の割れ目をこじ開け、先へと突き進む。荒々しい挿入は、膣を一息に最深部まで貫いた。

「うおあああああっ！」

「あはひいひいひいっ！」

弱点同士の過激な摩擦に、幼馴染二人のよがり声が重なる。

「う……かつ……ああくっ……愛美……ちゃんっ……！」

和馬は息を荒くしながら、愛美の背中を見下ろした。その間にも、亀頭に集中する敏感な粘膜が、隈なくねぶり回されている。竿の皮も脈打つ襞に四方から押さえられ、根元方

向へ扱き上げられていた。

「くっ……はあああっ！ ま、愛美ちゃあんっ！ 気持ちいいっ……よおおっ！」

和馬は失神しそうな中で、自分を保とうと足掻いた。とはいえ、彼がどうにか繋ぎ止めている意識も、もはや快楽を得るためにしか働かない。考えられることといえば、いかに二人で気持ちよくなれるかだけだった。

（愛美ちゃんが裸エプロンをしてくれたんだもん……っ。ぼ、僕もっ……何かキッチンでできること……したいっ！）

愉悦でぼやける目を周りに走らせた彼は、ふと柵の中のものに気付く。

（ハチミツの……瓶！）

いつだったか、友人から借りたアダルトDVDに、ハチミツを使ったプレイが収録されていた。和馬はおぼろげな記憶を頼りに、わななく手で柵のガラス戸を開ける。掴んだ瓶から蓋を取ってみると、むせ返るような甘い匂いが、鼻腔へ潜り込んできた。

一方、少年の思いつきが分からない愛美は、困惑の声を上げている。

「あ……あの……おっ？ かず……まっ……様ああっ!？」

それを聞きつつも、和馬は答える間が惜しかった。

「待ってて……えっ！」

自分でも意味不明な言葉を返しながら、左手にハチミツを垂らす。それから瓶を傍らの

椅子に置き、空いた右手にも左手のハチミツを移した。

「僕っ……今日はこうしてみようと思っ……！」

少年は声を上ずらせながら、幼馴染の下へ手を回し、両乳房を鷺掴みにする。

ベチャリ！

巨乳を包むハチミツの粘っこい音に、「あひっ!？」という愛美の悲鳴が重なった。女体も驚いたように震え、彼女と接する三点、両手と肉棒が揺さぶられる。

和馬は令嬢が状況を理解するより早く、彼女を抱き起こし、立位に近い体勢で、黄金色の粘液を柔肌に広げ出した。豊満な乳房は、軽く撫でただけでもタプタプ踊る。もしもいじり続けたら、ハチミツと一緒に溶けてしまいそうだ。

「前に聞いたんだけど……こういうのハチミツプレイっていうんだって……！」

説明しながら、和馬の胸は奇妙に高鳴っていた。手に伝わるヌメリは、掌と乳房の間で次第に人肌の温もりを帯びていく。それが愛液を連想させ、捏ね回していると、彼までがこそばゆくなってしまう。

「あうんっ……和馬っ……様あつ……！ た、食べ物^{たしな}を粗末にするのは……ひああっ！」

ようやく何をされたか分かったらしい令嬢が、身をくねらせながら、珍しく窘めてきた。だが、和馬としても、始めてしまった以上、後戻りはできない。

「ごめ……んっ……！ でもっ……んっ……もお……ちよつと、だけっ……付き合っ……」

て……えっ！ どっ、どうしっ……てもっ……駄目なら……やめるっ、から……っ！」

彼は切れ切れの返事と共に、腰をズリズリ後退させる。途端に周囲へ張り出すカリ首に濡れた膺襷が引っ掛かり、息が詰まった。

愛美もいきなり動き出した肉棒の感触に、

「ひあああつ！ あっ……う、動かれたらっ……あああんっ！ わ、わたくしいいっ!？」

真面目だった発言を、よがり声へ変えてしまう。そこで少年は一旦動きを止め、

ズズッ！

一回目を上回る勢いで、女芯へ己を突き入れた。波打ちながら密集する襷の中を、敏感な亀頭で突っ切ったため、またしても脳天が至高の愉悦にかき回される。

「いひいあああうっ!？」

蹂躪された愛美も、和馬の腕の内で盛大に背筋を仰げ反らせた。その拍子にハチミツまみれの肌と肌がズルリと滑りかけ、和馬は慌てて手の力を強める。

「んっうああはあああつ！」

巨乳を乱暴に扱われ、許婚は声をさらに大きくした。だがその響きは、痛がついているにしては、あまりに甘やかだ。

「う……動くよっ！」

和馬は吠えると同時に、本格的な抽送を開始した。ギリギリまで下がり、めいっばい突

っ込み——子宮口まで届いた瞬間と、肉棒を亀頭冠近くまで抜いた瞬間は動きを止めるが、それも腰に勢いを乗せるためだ。いざ動き始めると、碎けてしまいそうだった下半身は、自分でも驚くほどの力強さを見せた。

グチャッ！ ニチュッ！ズチャッ！ ブチュッ！

和馬が暴れるままに、手の内ではハチミツが、股間では愛液が、空気と混ざり合っ、はしたない音を立てる。それが和馬の欲望に拍車をかけていった。愛美を悦ばせたくてハチミツを使い始めたはずなのに、もはや彼自身がこのアブノーマルな行為の虜になってしまっている。

(もつとつ……もつと愛美ちゃんのあちこちに……っ！)

彼は乳房を離すと、両手をエプロンの肩紐がかかる辺りへ移した。掌に残っていたハチミツをそこへベットリと擦りつければ、桜色に染まっていた肌は、あつという間に粘っこい光沢を帯びていく。その不自然な色合いは、ひどく淫らであった。愛美も食べ物のもつを別の場所にまで広げられ、何か感じるものがあつたらしい。

「和馬っ……様ああんっ……あああっ……！こ、これ以上……はっ……わっ……わたく……しいっ……あひっ……変な気持ち……にっ……いっ！あっ……ひああうっ！」

自分の中の変化に戸惑うように支離滅裂な訴えをしてきている。だが、それでも少年はやめなかった。

「ん……ううっ……ああむっ！」

彼は答えもなしに、汚したばかりの肩へ顔を寄せ、大きく口を開く。ペロリと粘液を舐め取れば、舌に広がるのはクドいほどの甘みと、汗のほのかなしよっぱさだ。

「甘い……よっ！ 愛美ちゃんっ……！」

かすれ声で感想を述べると、愛美の肩がブルッと揺らぎ、膣壁も男根の周りで大きくなってくる。

「んっ……はううっ……やつ……ああんっ！ か、和馬様に……味見……され……っ……あああひ……っ！」

令嬢はいよいよ陶然となってきた。彼女の内、罪の意識を快楽が覆いつつある。それどころか、汚され、舐め回されることで、これまでにないマゾヒスティックな興奮に目覚めてきたらしい。

和馬は調子に乗って、舌をしつこいほどに柔肌の上で走り回らせた。口を寄せたため、下半身のピストン運動は緩やかになってしまいが、もはや少年ペニスの愉悦抜きでは我慢できない。彼は子宮口まで深々と突っ込んだままのペニスで、何度も「の」の字を描いた絡みついてくる濡れ髪をかき分けると、龟头も竿も纏めてゾクゾク疼く。愛美も粘膜を広い範囲にわたって擦られることになる。

「わたくっ……しいいいっ……もうっ、駄目ですうううっ！ いけないっ……ことなのに

いいひつ……和馬様のなさることっ……き、気持ちっ……よすぎますうううっ！」

こうまで言われたら、肩をねぶる動きにも熱が入る。

やがて、ハチミツはほとんど拭い取られ、代わりに唾液が令嬢を濡らすようになった。もう掌にも粘り気は残っていない。

(よお……しっ！)

和馬は思いきって顔を上げる。脚の位置を整え、両手を乳房に戻し、愛美を力強く抱き寄せた。この動きで、愛美も律動が本格的なものになると気付いたらしい。

「来てください……っ……このまま……わたくしを……イカせてください……い……！」
上体を反らし、涙目で和馬を見つめてくる。

「うん……！」

和馬は頷き、力任せの動きを始めた。

ジュブッ！ ジュポッ！ グチュチュッ！

荒々しい出入りによって、結合部の水音や腰のぶつかり合う音は、跳ねるように大きくなる。ペニスと秘洞をじっくり馴染ませた上、ハチミツを使って気持ち昂らせた末の責めだ。和馬は頭がジンジンと疼き、自分がどう動いているのかさえ把握できなくなっていた。ただ、乳房の感触が、襲の脈動が、ヌメリが、熱が、どこまでも気持ちいいことは本能的に分かる。詰め込まれた愉悦で、肉竿全てが破裂してしまいそうだ。



「愛美ちゃああんっ！ 僕っ……またイクウツ！ イキそうだよおっ！」

無我夢中で喚く和馬。それに応えて、愛美も艶っぽいよがり声を張り上げた。

「イッ……てえええっ！ イッてくくださいいいいいっ！ ああああっ！ こっ、今度は一緒にいい……いいイキたいんっ……ですうううっ！ ふしだらなわたくしも……おおっ……どう……かあっ……どうかああんっ！ イカせてくださいいいいいひっ！」

彼女も果てる寸前だった。しかし、彼女は身体に力が入らない中でも、腰を振るのだけは止めようとしない。煮えたぎった蜜壺で、和馬を徹底的にねぶりまくる。

「愛美ちゃんっ！ 愛美ちゃんっ！ 愛美ちゃあああんっ！」

限界を自覚した中で、和馬はさらに腰遣いを速めた。その暴走気味のピストンに、またも精液が呼ばれ、尿道を拡張しようとする。

少年は菌を食いしぱり、遠からず洪水のようにやってくるはずの絶頂感を受け止めようと、全身に力を漲らせた。

淫らな泉を突くたびに、ペニスの内部はどんどん膨らんでいく。

（も……止まらないっ！ 止まらないっ！ く、来るうううっ！）

そう覚悟した瞬間、彼の逸物はついに弾けた。

「イッ……イクウウううああああああおおおっ！」

根元に充填された子種が、尿道の粘膜を逆撫でし、鈴口も一気に駆け抜ける。

淫語に吸い寄せられるように、和馬は詩織へ覆いかぶさり、メイド服の広い胸元に指をかけた。服とブラジャーを一緒に引きずり下ろせば、たわわな乳房が戒めから解き放たれ、女性器を抉られるままに、ブルンブルンと卑猥なダンスを始める。ブラで吸収しきれなかった汗は、真下にいる薫子のあどけない顔へと飛び散った。

和馬は揺れ動く乳房へ、枷のように指を巻きつけ、テクニクなど関係なしに揉み絞る。加えて、もう一方の手も、指を軽く舐めて湿らせてから、ヒップに張り付かせた。

ズチュブッ！

胸でしている以上の乱暴な動きで、人差し指を排泄孔に押し込む。括約筋の締め付けは、指先で感じた直後には、もう付け根のところへと移っていた。それだけの勢いに貫かれ、詩織もとうとう決定的なほどに身悶える。

「うっ……ひああああつ!? 和馬様ああつ……詩織のっ……詩織のいやらしいケツマ〇コがっ……広がっ……あああつ! 感じっ……ますうううっ!」

和馬は直腸内の体温に指を茹で上げられながら、アヌスが詩織の一番の弱点なのだと思います。出した。

(よしっ……近藤さんは……ここを続けていけば……っ!)

突破口を見つけた思いで、捕まえた爆乳から手を離し、身を起こす。

「近藤さんっ……僕っ、もうっ……薫子ちゃんの方に戻るねっ……!」

叫びながら、最深部まで潜り込んだペニスを抜いていった。

「はあっ……いいっ！ 詩織にはっ……ケッ、ケツマ○コ虐めっ……続けえっ……ください
ひいっ！」

詩織は亜麻色の髪を振り乱し、ガクガクと頷く。だがその一方で、彼女の秘洞は少年の行動が不服だといったげに、壁の締め付けと襷の巻きつきで、陰茎を引き止めようとし続けていた。

「うっ……くうぐっ！」

和馬の内でも、急激に強まる射精感。

(な……んでええっ!?)

彼は自覚していなかったが、これまで果てずに済んだのは、動きと呼吸を無意識に規則的なものへと変えていたからなのだ。しかし、アヌスへの責めを始めたか、薫子へ戻ろうと考えたりしているうちに、いつしかそれが失われてしまった。

「ふっ……うううむっ！ くっ……あああっ！」

身を振りながら、やっとの思いで外へ出る。次の瞬間、軽くなった肉竿は、腹まで一気に跳ね上がった。湯気が立ちそうなほどに火照り、ピクッピクッと小刻みに揺れる様は、雄々しいながらも、絶頂を目の前に控えたものだ。

それでも、和馬は詩織のウィークポイントをほじくり続けながら、腰を落とし、薫子の

クレヴァスへ男根をあてがった。

「くぐううっ！」

ズブズブジュブウウッ！

三度目の貫通——。

すでに危険領域に足を踏み入れた少年にとつて、その悦楽は全神経が蒸発しそうなほど凶悪なものだった。だが、彼は溢れかけた声を、力づくで喉の力に押し込む。もしもここで大きく息を吐いたら、肉棒の栓までが崩壊してしまいそうだ。

もつとも、追い詰められているのは、薫子も同じらしい。

「んひゃあああああつ！ かじゅまあああんっ！」

詩織の下で嬌声を溢れさせる彼女は、もはやいつ果ててしまってもおかしくないところまで来ていた。

「あああつ！ かじゅまっ……かじゅまあああつ……かえつてきたはああああつ！」

令嬢の剥き出しの情欲に、和馬も勇気づけられる。

「薫子ちゃんっ……このままっ……一緒にイこうっ！」

呻き混じりに呼びかけ、狭い腔道内で往復を再開した。

後退してエラ周りに愉悦が走れば、果てる前にまた奥まで己を捻じ込む。前進した亀頭をしゃぶり回されれば、絶頂感を散らすように、腰を引く。

詩織の菊門でも、指の出し入れを愉しみ続けた。

(人差し指だけじゃ……きつと近藤さんには足りない……!)

そう閃いて、中指と親指も追加する。三本の指と指を離せば、肛門は異常なほどに広がり、腸の内壁を覗き見ることさえできそうになる。だが、そこまでひどい扱いをされても、詩織は悦びの言葉を吐き散らす。

「いいですうんっ……いいんですううっ！ もおっ……イキそうっ……なのですううっ！ ケツマ○コおおっ……グチャグチャああおっ！」

淫乱メイドは薰子をかき抱き、パイズリするように、乳房で主人の顔を挟み込んだ。

「うはああぷっ！ ひおり……いいっ！ んぢゅ……じゅばあっ！ ひいうあっ！」
半ば口を塞がれてしまった少女は、苦しげにもがきながらも、膨らみへとむしゃぶりつく。両手を詩織の背中に回しさえする。

「薰子様 ああっ！ ひっ……ひおおおうっ！ おおっ……ひぐっ……いぐっ……いぐううっ！ イクぐうううううあああっ！」

「ひぐっ……ひっちやううううっ！ うふはああっ！ ひもちよしゆぎっ……いいあっ！ ひんじやううううっ！ 死んっ……じやううあふうあはっ！」

同じ速度で暴れる指と男根に、主従のよがり声はいやらしく混じり合う。

「近藤さん！ 薰子……ちゃあんっ！ 僕もっ、僕もイクよおおおっ！」

和馬は断末魔のように天井を仰ぎながら、背を反らせた勢いで、子宮口へ激しさ最大の突きを打ち込んだ。その瞬間、薫子の膈壁はギュウツと縮こまって、男根を食い締める。同時に上の口から放たれる、ふしだらな絶叫。

「いっ……いひやつ……いいくうううむううんああああああああはあああああつ！」
オルガスムスの大音響は、重い詩織の乳房を押し退けて、室内の空気を振動させる。

そんな令嬢へ忠実に従うように、詩織がしなやかな四肢を強張らせた。伸びきっていた括約筋を硬直させた。全身をビクンビクンと痙攣させた。

「イ……ぐつ……イぐうううあ……おあつ……あうああひいいいいひいいお
おおおおおつ！」

美少女と美女の立て続けの絶頂は、ペニスと指を揉み潰すような衝撃を和馬にもたらず。
「うううあああつ!? きつううあああああつ！」

吠える少年の思考も完全停止だ。残された力は、股間の一点へかき集められる。全身が虚脱感に襲われる中、男根のみが狂ったような脈動を開始した。

ビュブブッ! バビュルッ! ドククブビュルウウッ!

幼馴染の胎内に撒き散らされる大量の子種。その奔流が、和馬の尿道粘膜も問答無用に擦り上げた。頭が空っぽになっても尚、男根の内外を襲う法悦からは逃れようがない。

「うはあああああつ！」



「んっ……ううっ!?」

大事な場所を割られるのを感じ取って、さやかがますます身体を硬くした。いかに受け入れ準備が進んでいたとはいえ、奥へ入り始めると、途端にさやかの秘唇はきつくなる。全身が強張っているから尚更だ。

「さやかちゃんうっ……で、できるだけ楽にして……ねっ」

和馬は腰を止め、リラックスしてもらおうと令嬢の髪を梳いた。

「う、ん……」

さやかは頷くものの、依然として力を抜く様子がない。

（僕の方がちゃんとしなきゃ……!）

和馬は改めて自分に言い聞かせると、再び前進していった。茹だったような熱さの粘膜に亀頭を擦られながら、できる限りゆっくり淫肉を割っていくと、途中で薄いゴムのような処女膜に行く手を阻まれる。

「奥まで……いく……からねっ!」

和馬は告げ、それまで丁寧に使っていたペニスを、グイッと強く押し出した。

プツリ……ッ!

儂い抵抗は一瞬で破れる。

「ひぐううっ!?」

さやかは切なげな声を絞り出した。ボーイッシュな顔を泣きそうに歪めている。だが、皮肉なことに彼女が痛みを堪えようとすればするほど、膣にも力が入り、ペニスとの摩擦は苛烈なものになってしまう。

「くっ……うううっ！」

和馬もその圧迫に呻いた。狂おしい法悦と、それを思い通りに味わえないもどかしさだけが、いつぺんに股間へ襲ってきて、頭は半ば真っ白。目の前には星が瞬いている。

「さやかちゃんっ……っあっ……落ちて着いて……！ もっと力っ……抜いてえっ……！」
思わず吠えるように頼んでしまうが、打ち震えるさやかにはやはり通じない。それでもどうにか、集まってくる無数の肉襷をゴリゴリ突き抜けるうちに、肉棒の先端は彼女の最も深い一点へとぶつかつた。

「う……あはあああっ……！」

動きを止めた和馬は、大きく息を吐く。

「さやかちゃん……奥まで入れたよ……っ」

蜜壺内の高温に眩暈を覚えながら、我慢を続けてくれた大事な幼馴染へ教えた。彼の動きが止まったことで、少女にもほんの微かなゆとりが出てきたらしい。

「うん……わたしも分かるっ！ お腹の中が……和馬君で満たされてるって……っ！」
両手を顔の上からどけ、涙で濡れた顔に喜色を滲ませる。

だが、表情こそ可憐なもの、全身のそこかしこには、ロマンチックさとかけ離れた淫らな雰囲気は漂っていた。

仰向けになつたせいでやや平らになりつつも、発情した乳首をしつかり浮き立たせる大きなバストには、精液がこびり付いたままだ。

パリッとしていたスーツも、背中の下敷きになつて皺だらけ。

長い脚ははしたなく左右へ広げられ、中央のクレヴァスには太い肉棒が深々と突き立っている。

(エッチなんだけど……でも、可愛いっ！)

和馬は汗まみれになりながら、幼馴染をひたすら見つめてしまう。と、その袖を脇から軽く引つ張る者がいた。

「えっ……？」

気を散らされた少年が振り返ると、ワイシャツを摘んでいるのは詩織だ。彼女は身体にへばり付いていた白濁をある程度拭き終え、音も立てずに和馬へにじり寄ってきていたのである。

「な、何……っ？」

さやか以外を置き去りにしていたのが少し後ろめたく思えて、和馬は早口で尋ねた。すると詩織はトロンとした眼差しで小首を傾げる。

「薰子様達は……さやか様と少々トラブルがありました……。ここで……仲直りをしておくのがいいと……思うのです……」

「仲直りって？ どうするの？」

「それは……」と詩織は後ろを振り返った。何気なく彼女の視線を追った和馬は、そこにいた薰子達の姿に思わず言葉を失ってしまう。

タイプが違う三人の美少女達は、各々の服をあられもなく着崩していたのだ。

薰子だけならまだ分かる。彼女は和馬の上で腰を振っていた時から、すでにフリルだけのブラウスを半脱ぎにしていたのだから。

だが、和馬がさやかと悪戦苦闘している間に、愛美と凜までが目のやり場に困る姿になっていた。

愛美はベストを脇の下の高さまでずり上げて、ブラウスのボタンも全て外している。白いブラジャーのカップまで引き下げており、丸ごと露にした乳房の膨らみで、ベストを上げ、ブラウスを左右へかき分けていた。

凜の姿も主人に近い。エプロンの上半分は、肩紐を緩めて胸元をたるませているし、その白い生地の下から表に出した紺色のメイド服の前も全開。ブラジャーこそ着けたままだが、それは彼女が今まで使っていたものと違い、シースルーな上に、紫色が惱ましい妖艶なものだ。

そんな姿に、和馬の股間が反応する。

「ん……あつ……」

膣内の変化へ敏感に反応するさやかか位置からも、三人の様子は見えたようだ。

「なっ……仲直り……って……何をやる気なのよ……?」

赤くなった顔に、心配げな表情を覗かせる。その質問に、詩織は感情の乏しい声で説明した。

「さやか様が楽になれるように……お手伝い……するのです……」

「お……お手伝い……っ……?」

ますます消え入りそうになるさやかか質問。だが、詩織が答えるより前に、薫子と凜が動き始めていた。

「まっ、昨日のことは大目に見てあげるわよっ」

薫子が少し意地悪く笑いながら、さやかか右隣で四つん這いになる。

「で、ではっ……北条様っ、失礼しますっ」

凜もギクシャクとさやかかの左隣に両肘と両膝を付く。

（うわ……）

和馬はアタフタと視線を左右に走らせた。さやかと仲直りするための行動——のはずなのに、ロリータ衣装に包まれた小さな尻と、黒いメイド服のかぶさる美尻が突き出された

のは、和馬に対してなのだ。

「和馬あ……あたし達のこと弄ってよね……っ」

自分からスカートを捲り上げ、誘ってくる薫子。彼女の剥き出しの秘所では、未だに精液と愛液の混合汁が白く泡立っていた。

「う……あ……わ、私もっ……頼む……っ」

まだ羞恥を残している凜も、幼い令嬢に続いてスカートを持ち上げる。彼女の股間にはまだパンティが残っていたが、ブラジャーと同一の素材でできたそれは、男を誘惑するためだけに作られたものだ。まるで紐のように細くなった中央部からは、陰唇がポロリとこぼれてしまいそうである。

「き、城之崎さん……こういう下着もいい……ね……」

和馬が声を上ずらせると、凜の腰がヒクリと震えた。

「きよ、今日の午前中……近藤に連れて行かれた店で……買ったんだ……。お前の前では、可愛い下着を使いたかったから……」

「そう、なんだ……」

詩織に勧められ、おろおろと不慣れな下着を選ぶ姿が、目に浮かぶようだ。しかし、それもこれも、全ては和馬を想ってしてくれること。

「よく似合うよ……っ」

和馬は呼吸も荒く、さらにランジェリーの絡む股間を眺めた。そこへ薫子が焦れたような声を投げ掛けてくる。

「ねえ……早くしてえ……っ」

「あ、うんっ……！」

慌てて右手を持ち上げた少年は、幼馴染の小さな秘所をまさぐった。

「あっ……来たあ……っ！」

喜悦の声を聞き、自分が中出した汚濁の粘っこさも実感しながら、左手で凜の下着も横にずらす。直接触れてみると、こちらの割れ目も淫蜜をたっぷり洩らし、火の点いたような熱さになっていた。

「んっ……ふううんっ！」

敏感な場所への攻撃に、メイド少女はシートへ突っ伏すように肩を疎ませる。

和馬は二つの割れ目へ、同時に指を挿入させた。

グチャリッ！ ジュププッ！

薫子の膣は極度に狭い中へ、無数の柔壁が並んでいる。凜の膣は入り口から奥まで無駄なく引き締まっている。

(どっちも……気持ちいいっ！)

指を強く押さえる点は同じながら、微妙なところで異なる二つの感触が、和馬の性欲を

かき立てた。挟られた側の反応に至っては大違いで、

「ひにやあああああつ！ かずうつ……まああああつ！ 気持ちいいのおおつ！」

「う、上杉いいいっ……いやっ……そんなに擦ったらっ……あひいんっ！」

薫子は甘えるようによがり狂い、凜は自分の淫らな面へ振り回されるように身悶えている。そんな個性も、これまた興奮の材料となる。

と、彼の見下ろす先で、薫子が左手を、凜が右手を彷徨させた。彼女らが目指したのは、精液で汚れたさやかかの乳房だ。

「ひはああうっ!? だっ、駄目えええっ!?」

計十本の指と二つの掌を柔肉に押し付けられ、さやかかの口から素っ頓狂な悲鳴が上がる。だが、秘唇を貫かれたままでは、逃げるなどままならない。

(そっか……)

和馬は驚きながらも納得する。

「詩織の言うお手伝いとは、痛みを和らげるため、よつてたかつてさやかを感じさせることだったのだ。」

「あはっ……やはああんっ……さやかかってばっ……何よっ……この胸……ええっ！ おつきすぎるじゃなっ……あああううっ！」

「ほ、北条様……あひっ……いはああっ……いかがっ……ですか……ああうっ！ あっ……

…あああんっ……！」

「ロリータ姿の令嬢は自分の持つていない感触を楽しみながら、初心なメイドはさやかかの気持ち聞きながら、それぞれのやり方でさやかを責め始める。もともと、彼女らがさやかかの反応を見ていられたのなど、最初の数秒だけだった。何しろ、二人は和馬の指で悶えている真っ最中。乳房への愛撫はどんどん荒々しくなり、ついには子種の残滓を、軟膏のようにグリグリ擦り込み出す。こんなやり方では、純潔を失ったばかりの令嬢の肌には性臭が染み付いて、取れなくなってしまうそうだ。

「やっ……やあああっ！　こんなのっ……駄目えええっ！」

さやかが哀願してもお構いなしだ。それどころか、

「あはっ……はひやあああっ……かじゅまあああっ！　あたひっ……ちゃんとやるからあああっ！　ごほおびにもっとかきまわひてえええっ！」

「上杉いっ……上杉いいいっ！　私いいいっ……こんなにふしだらに……いっ！　情けないけれどっ……止まらないんだ……あああひいいんっ！」

薫子と凛は、とうとう自分達で腰を前後に揺すり始めた。そんなおねだりに触発され、和馬も二人の女芯を乱暴にかき回す。指先から付け根にまで、隈なく媚薬のようなヌメリが引っ掛かり、耳へはグチャグチャいう音がステレオで入ってきた。

そこへさやかのよがり声も加わっている。彼女がもがけば、膣は強くペニスを捻り上げ、



その度に、和馬は腰が抜けそうになる。まださやかへの抽送は始めていないというのに、何かの弾みでイカされてしまいそうだ。見下ろすと、陰茎には処女血がジンワリと絡んでいた。

(僕っ……おかしくなりそうだ……あ！)

和馬が許婚達の女体に没頭していると、その正面へ愛美までがやってきた。

「まなっ……ちゃんっ!？」

「わたくしも仲直り……しますね」

艶っぽい微笑を浮かべながら、令嬢は膝立ちとなり、上半身を和馬の方へ倒して来る。自然と彼女の顔はさやかの股間の上に、股間はさやかの顔の上に乗る形となった。

「ふふっ、さやかさん……わたくしの大切なところ……触ってください……っ」

少しだけ恥ずかしそうにしながらも、愛美はスカートを自分の手で捲り上げる。

「や……ああっ!？」

「あ……っ」

さやかが新たな悲鳴を上げ、和馬もギョツとなった。令嬢はすでにパンティを脱ぎ捨てており、さやかの眼前に突き出されたのは、剥き出しの女性器だったのである。

「ひあっ……ま、愛美さんが……ああっ……こんな……やらし……いつ……あああっ!」

嘆くような言葉を吐きつつも、さやかはすっかり場の雰囲気飲まれてしまっていた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>